

第38号

(2020年4月10日発行)

発行: 中央大学学員会 出版白門会

CONTENTS

(お名前は敬称略)

- ▽2020年新年会報告 1
- ▽坂本静男氏新春講演会レポート 2
「アンチ・ドーピング ドーピングって何? なぜいけないの?」
- ▽白門同窓生、話題の本 2
門田隆将著『死の淵を見た男』
- ▽学員交歓「縁は異なるもの味なもの」 2
やまと師匠追っかけの記―
- ▽「2019年度 経済学部学生による」 3
プレゼン発表会」
- ▽ホームカミングデーに参加して 3
…北村信治
- ▽第95回箱根駅伝応援報告 4
- ▽第19回能楽鑑賞会に参加して 4
- ▽告知板 4
- ▽編集後記 4

出版白門会の関連行事予定

- ①会報発行 4月10日
- ②街歩き企画 5月ごろ
※詳細が決まり次第、HPと会員メールにてご案内いたします。
- ③第21回 出版白門会総会
7月17日(金) 18時30分～
会場: 出版クラブ(神保町) 4階
会費: 6,000円
※後日、出欠確認を兼ねたご案内をお送りいたします。
- ④ホームカミングデー
秋 多摩キャンパス
※詳細はHPでわかり次第ご案内いたします。
- ⑤箱根駅伝予選会応援
10月13日(土) 9時30分
JR 立川駅東改札口前集合
- ⑥第20回能楽鑑賞会
12月12日(土) 12時開場 13時開演
会場: 国立能楽堂(渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1) / JR 千駄ヶ谷駅より徒歩5分
狂言 猿智(さるむこ) 茂山 宗彦(大蔵流)
能 舍利(しゃり) 金春 安明(金春流)
※「申し込み方法」「内容詳細」は10月発行予定の第39号会報に同封する、申し込みチラシをご覧ください。
- 行事に関するお問い合わせは、下記メールでご連絡ください。
E-mail: pub.hakumon@gmail.com
なお、上記行事のほか、皆さまの仕事に役立つ企画、あるいは懇親の企画を検討中です。



● 出版界に出版白門の知恵と情熱を! ●

●基本方針

1. 会員ニーズに応える活動による、会員満足度の向上
2. 中央大学、学員会、他支部との連携強化
3. 会費徴収促進による、財政の健全化

2020年新年会報告

暖冬の影響残る1月24日、会員36名出席のもと、元号が令和になって初めての出版白門会新年会が、千代田区の出版クラブビルで開催された。

北村広報委員長の司会で始まった第一部の新春講演会では、早稲田大学スポーツ科学学術院教授で、国際ハンドボール連盟委員理事を務め、2000年シドニーオリンピック大会へは本部ドクターとして参加した経験を持つ坂本静男氏を講師に迎え、「アンチ・ドーピング ドーピングって何? なぜいけないの?」というテーマでご講演をいただいた。ロシアの国家ぐるみのドーピング問題が記憶に新しいが、オリンピックイヤーを迎え、ドーピングについて正しい知識を身につけようと専門家である坂本氏の話に、会員は真剣に耳を傾けた。ドーピング検査官としての体験に基づいた、尿検査の子細な実態や、陽性反応でメダルを剥奪された選手の実例等、大変興味深いリアルな話の連続で、予定の1時間をオーバーするほどであった。坂本氏が繰り返し訴えた「アンチ・ドーピングが一番大切なことは、

薬害から選手を守ること」をしっかりと胸に刻んだ。

第二部では初司会の立石書記の進行で、校歌斉唱、風間会長の「駅伝は残念だったが、野球では秋のリーグ優勝と健闘した。今年は我が巨人軍の日本一と、出版白門会に若い会員の入会を」との挨拶に続いて乾杯の音頭をとり、懇親会が賑やかにスタートした。

初参加者紹介では、森副会長の勧誘により参加した講談社の平成卒、山崎慶彦さん、生方杏里さんからフレッシュな挨拶があり、会場から大きな拍手が送られた。続いて、恒例の新春ビンゴ大会は、立石さんセレクトのバラエティー豊かな賞品を前に、続々と「ビンゴ!」の声がかかり大盛況のうちに、全員に商品が行き渡り終了した。土屋会計監査の歌唱指導による応援歌に続き、最後に森副会長の中締めで名残を残しつつお開きとなった。その後、場所を「酔の助」に移した二次会は過去最多の25名の参加者で遅くまで大いに盛り上がった。



(左上から時計回りに) 風間会長挨拶、和やかに懇親、森副会長中締め、土屋さん指揮による校歌斉唱、酔の助での二次会

出版白門会ホームページアドレス <http://pub-hakumon.jimdo.com/>

facebook 出版白門会サイトへのアクセスは検索サイトの「出版白門会 (中央大学学員会職域支部)」から…

2020年度出版白門会新春講演会レポート

1月24日、出版クラブに坂本静男氏を講師にお迎えし「アンチ・ドーピング ドーピングって何？ なぜいけないの？」との演題でご講演いただいた。

講師は現在、早稲田大学のスポーツ科学学術院教授であり、アジアハンドボール連盟医事委員長、国際ハンドボール連盟医事委員を兼任し、シドニー五輪では大会本部ドクターを務めるなど、ドーピング問題のオーソリティ。

1時間余りの講演だったが、スライドやテキストを使っただけの丁寧な解説を通して、日頃良く耳にすることが多い故に、私たちが知っている気になっているドーピングへの理解が如何に浅薄な知識であることが知らされた。

講演の冒頭では、ドーピングの歴史に触れ、西暦前からドーピングはドーブという名称で、動物を捕まえる際の恐怖感、暗闇への恐怖感の克服、あるいは眠気覚ましのために使われていたが、1900年代に入り、アメリカ横断ウルトラマラソンや、サイクリングのツールドフランスなどの競技などでも使用されるようになった。その結果、突然死まで起きるようになる。しかし、自



東京オリンピックで、ドーピング検査を始めようとの決定がなされ、メキシコオリンピックから実施された。

このアンチ・ドーピングについて坂本氏は、一般的にアンチ・ドーピングは薬に頼る成績はフェアではない、そのような事でもよい成績を残すことは子供の教育にも良くないと言った観点からの話が多いが、本当のアンチ・ドーピングは選手の健康を守り、選手が薬物の被害者にならないようにということから始まったのだという事をこの講演を通して一番訴えたいと述べた。

本講演ではまた、現場に携わる専門家ならではの興味深い話も聞くことができた。ドーピングを行うのは全出場選手、あるいは全メダリストかと素人考えでは推測するが、実は抽選あるいは、1位と3位の選手と言った競技によって色んな選考の仕方があるという。検査は、選手への義務と権利の説明、同意書への署名に始まり、例えば、採尿に関しては検査員が斜め前から排尿している所を目視するなど、実に厳格な監視と管理の元に検査が実施されていることが紹介された。それでも、カテーテルを使っ

た不正な採尿、禁止薬物が入っていると知らずに風邪薬を飲むなどのような、ウッカリドーピング、また、成績を上げんがために多種多様な薬物が使われるようになってきていることがドーピング検査を複雑にしていると、事例を挙げて解説された。また、検査に関連して、1検体に人件費を除いても14～15万円もかかるとの事、検査対象数が制限されるわけである。

禁止薬物でなくとも、サプリメントなど薬物を安易に使用する機会が増えている。プロテイン粉末などは小学生で70%、中学生80%、高校生90%、大学・社会人では使っていない選手がいなくらいだという。坂本氏がこの講演を通して一番強調された、「アンチ・ドーピングは選手を守るためである」のだという事を、以下の「反ドーピングに関する基本的な姿勢」の条項と合わせて痛感した講演だった。

【反ドーピングに関する基本的な姿勢】

- 安易に薬物を使用しない
- 安易にサプリメントを使用しない
- 薬物・サプリメントに頼らない選手、指導者、トレーナー、医師の育成
- 運動⇄栄養⇄休養のバランス

(広報委員 丹田公和)

白門同窓生、話題の本

『死の淵を見た男 - 吉田昌郎と福島第一原発』

門田隆将 (角川文庫・840円+税)

平成28年10月25日初版発行

本書は2011年3月の東日本大震災で危機的状況に陥った福島第一原発事故の記録です。著者の門田隆将氏が、関係者からの綿密な聴き取りと、事実の丹念な積み重ねによって、この未曾有の危機の実像に迫った力作です。関係者の発言は伝聞ではなく、本人から直接聞き取ったもので、本書は一級資料として後世に引き継がれていく「歴史書」と言っても良いでしょう。そして事実と事実の間で放電されるものをノンフィクションならではの手法で掘り取り、リアルに再現した、歴史書以上の歴史書となっています。

原子炉建屋の爆発後の連日連夜の報道は、昨今の新型コロナウイルス報道の比ではなく、国民は固唾をのんでテレビの画面にくぎ付けになっていましたが、今やその時の危機感も風化されようとしています。

ましてや、日本人の多くが、この事故が一部対応を間違っていたら、また、運が悪かったら、日本は北海道、本州、九州に3分割され、本州が人が住めない死の島になっていた事には、思いも及んでいません。私達のその後の人生が無くなっていったかもしれないのです。

ベントをするため原子炉建屋に死を賭して突入した人、荒れ狂う

原子炉を冷却するために、放射能の危険ゾーンの中に入って行って放水を続けた人たち、格納容器を死守するために、命を懸けて最後まで緊急時対策室に残った社員。この時の状況がこう記述されています。

「みんなを送り出したあと(中略)25人ほど残っていた。(中略)その時の静けさが井沢は、脳裡から離れない。

(中略)シーンとした中で残ったものがお互いの顔を見ました。悲壮感じゃないですよ。笑顔で言ったらあれだけど、なんていうか、独特の雰囲気でした」その時、黙っていた吉田所長が静寂を打ち破るように、こう言った。「なんか……食べるか?」。その場には死を覚悟した仲間のみに通じる爽やかさがあつたという。

この事故の終始を見取り、原子炉と官邸とを相手に格闘した、胆力の人吉田昌郎所長はこの後58歳の若さで亡くなる。

人間の記憶はあやふやなものだが、命がけで今日の日本を守った人のことは忘れてはならない。

もちろん、このような事故を起こした原因の追究と、検証も決して忘れてはならない。

(T.K)



<学員交歓>縁は異なるもの味なもの一やまと師匠追っかけの記一

令和2年2月1日、第12回幸兵衛会が開催された。言わずと知れた桂やまと、春風亭三朝、林家つる子の中大落研出身者3人の会である。会の名称の通りOBがプロ3人の話を聞いて、その後の総会であれこれ注文をつけようという会である。

さてその中のやまと師匠の人となりをちょっと記したい。仄聞するところでは中大落研では卒業後プロの噺家にはならないという不文律があったと聞く。その禁を破ってプロへと進んだのが彼であり、後輩にその道を開いたその人である。真打になる直前森岡理事に「今後後輩が真打になるん

ですよ」と知らされた。その進取の気性と、たまたま白門のみならず高校の後輩であり、また生まれも育ちも同じ下町荒川区という三要素とが重なり合って追っかけるようになった。

毎年暮れの古典落語「文七元結」と昨年7月初演の新作落語「吉原逃(ぬ)け一お直しより」に彼の真骨頂を見る。いずれも岡田嘉夫という著名な画家との斬新なコラボレーションである。会のたびに高座に引き込まれるのはもちろんだが、二人の対談に噺を練り上げる真剣勝負の緊張感と落語の奥深さを味わう。そして師匠の切れ味

鋭く、けれどやっぱり温かい語り口に加え、噺に磨きをかけるその丁寧さを知ってしまうと、ますます深みにはまってしまうのであった。

噺家にして、ある時は子供たちに落語を体験させることをライフワークとするPTA会長であり、またある時は望月初秀樹という長唄の名取等々落語を支える裾野の広い師匠に、今後とも注目あれ。そして独演会では某出版社勤務だったお内儀が、名物の前説をやります。ぜひお運びの程。

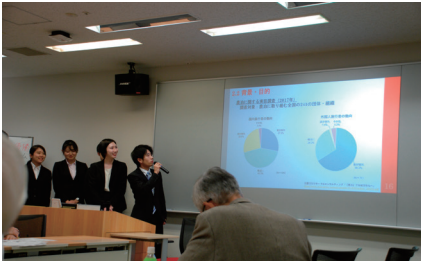
(組織委員 阿部信行)

学会年次支部協議会主催「経済学部学生ゼミナールプレゼンテーション発表会」

2月1日(土)午前中に、令和元年度の経済学部学生ゼミナールプレゼンテーション発表会が、後樂園キャンパスにて行われました。

- ①伊藤伸介ゼミ(観光班)
「農泊を利用したインバウンド事業」
- ②丸山佳久ゼミ(食育チーム)
「地方再生～食について考える～」
- ③丸山佳久ゼミ(スムージーチーム)
「地元野菜の消費を通じた健康水準向上と都市部での認知度向上に向けた取り組み」

以上、3つのチームにより各30分程度でのプレゼンテーションでした。



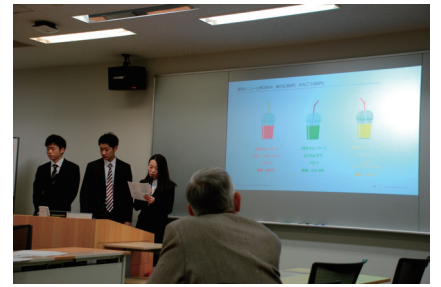
①は、2020年に4,000万人、2030年に6,000万人を目標に日本がインバウンド事業に力を入れている視点を軸に「東北×農泊×留学生」という観点から地方活性化を検討。外国人留学生を農泊のサポーターとして取り入れることで、農泊をビジネス化し留学生・農家・地域・旅行者にとってそれぞれがWinWinな関係になるような企画だった。しかし、外国人留学生＝農泊に理解があるという関係には若干の無理があり、課題が残った感じだった。



②は、先進国の重要なテーマとなっている「食品ロス」、すなわち過剰生産による大量廃棄が深刻な問題となり、途上国で起こる食糧不足とのジレンマをどう解決するかを研究している。「食育」＝子どもたちに食と紐づけ、「食は人生の柱である」というメッセージを推進し、自分たちが日ごろ食べている「食材」、特に地元食材の魅力を感じ地域に誇りをもつ食への興味・関心を高めてもらうことを目標に「親子料理教室」を介して幼少期から食への関心から「食品ロス」をなくそうという研究だった。当初は岩手県で行われた食育プログラムを大学に近い「立川市商工会議所」が学生たちの研究テーマに関心を示し「親子料理教室」へと進んだが…当初の研究テーマであった「食品ロス」との繋がりが薄くなった点が残念だった。



③は、今日の日本の「人口の減少、東京一極集中、そして地方格差が深刻な問題」をテーマにし、その解決策として地域の農



産物を使用したスムージーを開発し商品化したことが特記すべきものと言える。岩手県遠野市をフィールドにして「脳卒中死亡率全国ワースト1位(岩手県)」の汚点を地域の農産物を使用したスムージーを開発することにより、高齢者でも容易く「野菜を摂取できる」＝生活習慣の向上からワースト脱却への寄与がもたらされるという仮説を実行へ進めたことに好感が持った。

いずれのゼミも学生の視点を十二分に生かしたプレゼンテーションであった。発表毎に學員から鋭い質問を受けて答えていたが、「先輩方の社会人としての目線での質問はととてもありがたい。学生同士の質問からは想定できない内容を提示いただいたことで、さらに研究の深堀へのひとつになりとてもありがたかった。」と、学生からコメントをいただきました。

発表会終了後は場所を移して學員との懇親昼食会を開催。学生にとっては少し手厳しい先輩だったかも知れませんが、それも「後輩思いの先輩」としての行動だったことを後輩たちに伝え和気あいあいた昼食会が繰り返されました。

(広報委員長 北村信治)

2019年度ホームカミングデーに参加して

北村信治

「第28回ホームカミングデー」は「理工学部創立70周年」「法学部都心移転」の2つのお祝いを兼ねて後樂園キャンパスを始めたとした都心のキャンパスで行われました。また、卒後50周年記念/25周年記念の懇親会・中央大学の夕べの企画は東京ドームホテルで行われました。私自身は実のところでは、「卒後24年で懇親会の参加



資格なし」という立場ではありますが、大学を5年で卒業していますが、入学時換算で考えると「卒後25周年」に該当するようです。

数年前から、學員会副会長の山本さん(平成卒の副会長)から「學員会若手活性化ワーキングチーム」に入ってぜひサポートをして欲しいとの依頼(南甲倶楽部推薦枠)を受け、1年前から同期会のメンバーと「25周年懇親会」企画の裏方としてこの日を迎えました。私は同期会には入会しておらず、どんなメンバーで一緒の仕事をするか不安はありましたが…「同じ世代の白門の仲間」というだけですぐに打ち解けた関係を持つことができました。

当日、司会進行などしていたら、「あれ！北村さんじゃない？？久しぶり！！！」と、同じクラスだった女史に声を掛けられました。「卒業以来だけど…変わっていないね！(経年経過は除く)」と会話が弾みました。クラスの仲間の仲間など、「友達の輪」が広がりそうなども和やかな懇親会になりま



した。同時並行で進んでいた「中央大学の夕べ」では多くの愛校心溢れる先輩方の熱気に包まれた「大宴会場」のような雰囲気にも圧迫されました。年齢は違いますが「中央大学が好き」という気持ちで繋がっている多くの學員の先輩方に負けず劣らず、自分たちの世代も頑張らないと…と感じた一日でした。

第95回箱根駅伝応援報告

今年の箱根駅伝予選会の応援に会員の参加者が都合が付き、昭和記念公園に赴いての応援はできませんでしたが、各々様々な形で応援をしました。予選の切符を10位というギリギリで得ることができました。11位の麗澤大学との差は約30秒。ハラハラした學員も多かったのではないのでしょうか。

この結果を受け止めての本戦出場。選手たちの心には「後ろはない！前進あるのみ！」という気持ちで往路箱根へと駆け進んだに違いないです。昨



年優勝を逃がした「青山学院大学」、最近実力が向上してきた「國學院大学」「東京国際大学」といった大学の勢いが伝統校を脅かす存在になっているように感じます。

往路13位の結果は「頑張れば…シード権が獲れる。頑張りが足りない」と下位層へ…」と、複雑な思いが巡りました。思えば3年前、どん底を味わった中央大学。その時の1年生で崩壊しそうな部を立て直した舟津選手も4年生となり、有終の美を飾る走り…と思っていた学



員も多かったのではないのでしょうか。ところが、自身の戦力不足と「チーム全体で絶対に勝つ！」という

思いを胸に裏方に回りサポートに徹した行動がチームにも響き、復路の結果は10区を走った二井選手の区間6位の走りもあり、往路を1位上げた形の12位でフィニッシュ。シード権を獲った10位の東洋大学との差は2分25秒という来年に繋がる頑張りを見せてくれました。(北村)

第19回能楽鑑賞会に参加して

師走も半ばの12月14日(土)、恒例の能鑑賞会が開催されました。

内容は

狂言 柑子(こうじ) 善竹 彌五郎(大蔵流)

能 葛城(かづらき) 大和舞(やまとまい) 浅見 真州(観世流)

でした。

冬になれば深い雪に閉ざされる葛城山を舞台にした、幻想的な雪の能でした。山伏が山へ入れば、もうそこは一面の銀世界。

そこで演じられる静かな所作と、弱吟主体の穏やかで流麗な謡とが、さまざまな雪景色の移ろいを、我々の目に呼び起こす…そんなストーリーです。



昨年の能と同じように??睡魔に襲われることなく鑑賞することができました。

鑑賞後は場所をレストランに移し、懇親会を行いました。

今回は体調不良でご不在だった白石さんも体調万全で復活され楽しい「白石

節」を伺いながらの楽しい懇親会となりました。(北村)



告知版

■駿河台記念館の建て替えに伴い、學員会事務局の一時移転先は下記住所です。

談話スペースが併設されています。(旧駿河台記念館のような「個室」ではありません。)

平日：9:30～20:30

土曜：9:30～17:30 ※日曜・祝日は閉室

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-6-3 一ツ橋ビル4階

03-6261-1615

※一ツ橋ビルの正面玄関は平日19時、土曜15時に施錠されるため、それ以降入館ができません(出館については可能です)。

会議室を利用する際には入館時間にご注意ください。

■新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)の影響で

・「卒業式」は卒業生・修了生と教職員が一堂に会する形式での式典を中止し、学位授与という大学にとってかけがえのない慶事をお祝いしたいと考え、卒業証書・学位記を各学部等の卒業生・修了生を代表する総代・代表に手渡し、その様子や辞等を、インターネットを介して動画配信する形となりました。

・「入学式」は中止とし、新入生を迎え入れるという大学にとってかけがえのない慶事をお祝いしたいと考え、学長等の挨拶を「中央大学公式Webサイト」に掲載し入学式に代えることになりました。

■①出版白門会ホームページのご案内

アドレスは <http://pub-hakumon.jimdo.com/> です。Google や Yahoo といった検索サイトで「出版白門会」を検索すると上位にヒットしますので、そこからのアクセスも可能です。

②出版白門会事務局へのご連絡は下記メールアドレスをご利用ください。

E-mail: pub.hakumon@gmail.com です。

■会費未納の皆様へ(年会費金額¥5,000)

①同封の振込用紙にて、もしくは下記口座へお振込みをお願いいたします。

郵便振替口座記号番号 00180-8-600659

加入者名 中央大学學員会出版白門会

振込用紙がなくても、直接郵便局の窓口やATMでも手続きができます。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は、ゆうちょダイレクト(パソコン、携帯、スマホなど)もご利用いただけます。

②他行(銀行など)からの振込みをされる場合は下記口座をご指定のうえ、手続きして下さい。

ゆうちょ銀行 当座預金

店名(店番) 〇一九(ゼロイチキユウ)

口座番号 0600659

口座名義 チュウオウダイガクガイインカイシュツパンハクモンカイ

出版白門会は皆様の会費のみで運営しております。ご協力のほど何卒よろしくお祈りいたします。

編集後記

今号からDTP作業を古寺さんをお願いいたしました。会の運営経費の中で比較的大きな割合になっている部分を会員の手弁当で行うことで少しでも「財政の健全化」に寄与できればと思います。

編集作業をしている間の世間の話題と言えば「新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)」です。このウイルスは括弧書きにもありますように、10年前くらいに中国を中心に猛威を振った「SARS」の親戚的な肺炎のようです。インフルエンザのように「季節的」に終息する疾患でないところが非常に困ったものです。子供たちの「一斉休校」「卒業式の中止」と日頃の行動の制限や季節のイベントの中止が何とも残念な気持ちになります。自分自身に関して当てはめれば、愚息の幼稚園の卒園式の時が「東日本大震災」で自粛、そして今回が中学校卒業式の自粛(かなり縮小しての開催)と、社会情勢に翻弄されてしまった感があります。

外を見れば桜が満開な季節、「例年の普通な時勢」になって欲しいものです。(北村)